

二戸市合併10周年記念式典・特別講演会「～浄法寺漆の可能性～」

講師：(株)小西美術工藝社 デービッド・アトキンソン代表取締役社長

平成27年11月3日 二戸市民文化会館大ホール

皆様、こんにちは。小西美術工藝社のアトキンソンです。よろしくお願いいたします。

まず、最初に小西美術工藝社の会社のPRをさせていただきます。小西美術工藝社は、75名ほどの小さな会社ですが、仕事としては漆を塗って金箔をして、彩色をして、飾り金具をやっている、ほとんどの仕事为国宝・重要文化財の主に神社の修理をしている会社です。小西美術という会社は、日光からスタートしまして、ちょうど幕府が替わって、今日はちょうど明治天皇の御誕生日だったのですが、明治時代になったときに、もともと幕府が日光に来たときに泊まる施設が、天皇の御用邸にされました。その時に、要するに武家の趣味から朝廷の趣味に変えなければいけないということがありまして、小西美術がその漆塗りの担当をしていたようですが、それによって皇室との関係ができて、そこから例えば、伊勢の神宮さんであったり、全国のいろんな位の高い神社さんとの関係ができたんです。ですから皆さんは、旅行をするときに、だいたいどこかで小西美術の仕事を目にしているはずですよ。九州であれば、この間、八幡信仰の総本山である宇佐神宮を50年ぶりに修理しましたし、霧島神宮も小西美術での仕事でもあります。大阪であれば住吉大社、京都であれば伏見稲荷が5年前に仕事がやっと終わった所なんです。平泉の金色堂も小西美術での仕事でもあります。東京であれば、だいたい皇居の漆塗りが、小西美術が担当しているようなところですよ。

当然ですが、そこで何故、社長があなたなのという疑問があるのは当然皆さんお持ちだと思いますが、その理由は、私はもともとオックスフォード大学の日本学部なんです。あとにずっと経済を担当していて金融の不良債権問題ですとか、そういうような問題を90年以来、ちょうど8年前にずっとやってきました。8年前に一回引退しまして、それで割と遊んでいたんですが、ちょうど仕事を復帰するつもりはなかったんですが、結局は自分の軽井沢の別荘のお隣の人が、先代小西美術の社長だったんです。旦那さんは自分とあまり会わない人だったんですが、奥さんが先代の社長だったんですが、15代ほどずっとそれで守ってきた会社ではあります。自分のところで犬を飼っていて、向こうも犬を飼っていて、結局、犬のつきあいで人間もつきあわなきゃいけないという不思議なご縁だったんですが、ずっと、うちの会社みてもらえないの、コンサルでもやってもらえませんか、助言だけでもいいですからと、ずっと言われてたんです。あの人は素晴らしいところは、しつこいところが素晴らしかった。ずっと向こうはあきらめないの、まあ一回位は見に行こうかなと思って、見に行きました。ちょうど埼玉の歓喜院さんというお寺さんがあるんですが、素晴らしい国宝なんです。だいたい30年ぶりにそれを修理するというので、ちょうど、浄法寺の日本産漆を使って、100%でそれを修理していたところでした。あのときに、金融界にいたときは、日本政府との関係、あとは金融庁との関係、その前は大蔵省との関係が割と強かったんですが、いろんな問題がありまして、たぶん銀行の業界というのは、一番利害関係と言いますか、特権階級的な考え方が非常に強いところではありましたが、まあ、何となく文化財の世界では、聖地のように思っていて、そんなには問題がないだろうと思っていました。これが大間違いでした。実際に当時の小西美術工藝社を見てみますと、職人のかたまりの会社で、ずっとそれで国宝・重要文化財の漆塗りを担当しているにもかかわらず、実は4割の職人が非正規にされてまして、大昔は住み込みの制度で、最後まで面倒をみるような形ではあったんですが、保険だとか、いろんな問題の削減のために非正規にされていて、あんまり大切にされていなかったんです。同時に恥ずかしい話ではあります。バイトみたいな人もいれば、職人だという売りをしているにもかかわらず、実はもとペンキ屋さんだったとか、そういう人たちも外注

してあった時代でもありました。職人の会社で国宝や重要文化財でそういうことをやっているところは無いだろうと思っていても、最近、テレビで、杭が岩盤まで届いていないうんぬんという話がありますが、それと同様のことをやっていたことも事実では、残念ながらあります。当然、それによって会社としては傾いていました。みていると、この業界で本来は、ぜったいにここだけは崩してはいけないところであると思いますが、あの状態になっているのをみて、先代の社長がどうしても関わってもらいたい意味がわかりましたので、次第に会社との関係をもう少し強く持つようにしました。その中で一番最初に社長になったとき、いろんなことを決裁しなきゃならないときに、いきなりに漆の発注があがってきます。その漆の発注をみて、これは漆の発注なんだけど、国宝のための漆でしょう。これ、なんで中国産ですか。素朴な疑問として思いまして、聞いたら、仕様書では中国産70%、国産が30%、こりゃ、不思議な世界だなと思いましたが、ようするに国宝、重要文化財の場合は、もともとのものの状態に近いからこそ、国宝、重要文化財でありまして、そういう同じ漆だからといって中国産でもいいという、へたすればベトナム産でもいいですよという話であるはずがないんです。自分としては、中国産を認めるのであれば、同じ漆であればいいやという考えかたでもいいのであれば、じゃあ漆じゃなくても、別にペンキでもいいんじゃないのという考え方に発展しやすいと思います。ペンキだといいいいというのだったら、この木だって腐りますし、虫に喰われますし、そういう問題もありますので、漆ではなくてペンキにするのであれば、じゃ、木自体もやめて、法隆寺を鉄筋コンクリートにすればいいんじゃないのという考え方になりかねない。ですから、本物である以上は本物から少しでも、1%でも2%でもずれてしまえば、それはもう破壊の始まりであって、100%本物だから本物であるのであって、98%であるからいいということにはならないのであって、95%はどうか、9割であればどうなんだとなるはずです。何回も何回もこの日本産漆を使わないの。そもそも皆さんご存じのように漆というのは海外では、ジャパンと言いますよね。国と一緒になんですよ。中国の場合はああいう磁器ものがあるので、それがチャイナになってまして、それが磁器ものであると同時に国名にもなっている。このままで行きますとジャパンといいながらも、国宝であつても別にジャパンじゃないじゃないの。ジャパンといいながらも実はチャイナじゃないの、その中身は。それは全然違うので自分としては意味が全然わからなかった。それでですね、文化庁に対して、日本産漆を使わないのは文化庁行政としては、ありえない話でしょうということをやったら、そう簡単に向こうは降りないんですよ。今、現状がそうなんだから変える訳にはいかない。そこで、実際にどれくらいの漆が、文化財に使われているかどうかを、調べて欲しいということをやられたんです。幸いなことに、私はもともとアングロサクソンですから、分析は多少できるもんですから、業界団体がありまして、我が業界団体で、どの位、日本全国の国宝・重要文化財に中国産の漆が使われているのかというのを全部調べました。報告書にして、それを文化庁に提出しました。提出をしたら、いや、それはわかりましたけれども、日本産漆には変えるつもりはないということをやられました。じゃあ、どうすればいいんですか。実際に日本産漆に変えたときにいくらかかるかということをや分析してもらわないと変えられません。もともと負けるつもりはなかったんで、全部分析しまして、この全ての国宝・重要文化財の修理のために中国産をやめて日本産にした場合、結局上乗せ分としては、1億4千万円、100兆円の国家予算があるなかで、たった1億4千万円で全部、日本産漆に変えることができると報告書にまとめて、文化庁に行ってきました。文化庁の次の理屈は、それはわかりました実際に対応できるんですかということをやられまして、今度また、浄法寺もそうなんです、いろんな人を調べに行きまして、どの位の供給能力があるのかを全部調べました。その結果としては、当面、中塗り上塗りを国産にすることができたとしても、下地まで日本産漆に変えることができないということがわかりましたので、対案としては文化庁に対して、とりあえずは中塗り、上塗りを日本産漆に変えていきまして、ゆくゆくは下地まで全部日本産漆に変えるという話になりました。それでもですね、向こうが動かない。何故動かないんだろうというところで、たまたま、ご縁であるところ

ろで、修理をするためにお金が足りない京都のお寺から電話がありまして、うちのお寺でいろんなイベントをやりたいと言われたんです。幸いなことなのか、不幸なことなのかわかりませんが、そのお寺の一番親しいところで、皇后陛下ですね、今とても忙しいので、そういうことができないということをお答えしましたら、わかりましたと。翌朝、宮内庁から電話がありまして、皇后陛下のご意向ですので、何とかしてもらえませんかと言われてまして、さすがに皇后陛下は断れないということで、そこで、仕事をする事になったんです。その関係で、いろんなところで経済に関する講演会を久しぶりにやりまして、その一つの講演会で、今の話を聞いた一人が、そのお寺の所に寄付をしてもらうことになりまして、それでお寺の修理をすることが可能になり、完成しました。ある日、また日本産漆の話をしていたところ、本当に日本産漆をこのままにしておきますと、ゆくゆくは、これは消えます。中国産漆の値段が、中国経済が発展することによって、どんどん値段が上がってきています。上がっているところで、逆転した場合に、国としては日本産漆に替える気持ちになるでしょう。なったときに、日本産漆が無くなっていけばどうしますか。万が一に、今の摩擦みたいに向こうの方から送らなくなった場合は、日本の国宝・重要文化財はどうなりますかという話をしましたら、わかりました、私の友達を呼びましょう。私の友達とは誰だろうと思いましたが、しばらくしてピンポンしてきてその人が、入ってきます。なんかこの人の顔を見たことあるなと思ったんですけれども、名刺を出されて、文部大臣下村博文と書いてあるんですね。私の友達というのはこの人だと思いましたが、じゃあもう一回その話をしなさいと言われてまして、下村大臣にその話を全部しました。幸いなことに小西美術工芸社は、あの時は皇居の坂下門の漆塗りの担当をしていました。自民党政権ですからいろんな話をされていて、たった1億4千万の予算で本物に変えることができる、同時に日本の国宝で、別なものはないかもしれないが、日本の国宝に、日本人の首を切って、中国人の人たちに日本の税金を渡しているのは、いかがなものかと言ったと同時に、今は天皇陛下の目の前で漆を塗っているの、ようするに管轄としてあなたは、恥ずかしいと思いませんかと言った訳です。大臣はほとんど無反応でした。翌日に、失敗したなと思ながらも悔しい思いで夜寝ましたけれども、朝起きて会社に行ったら、いきなり文化庁から電話がかかってきて、文化庁のほうから、いや社長、昨日うちの大臣と何かしゃべりませんでしたか。いや、いろいろこないだの話をしました。いやあ、大臣が今朝来て、日本産漆を使わないのはけしからん話で、全部替えるとの話になって、結局、下村大臣のご英断で、いきなり日本産漆を、原則日本産漆にしなさいということが決まりまして、今、その方針で動いているところです。それによって、日本産漆はやっぱり、今までは1トンとか1.5トン位しか造っていなかったんです。中国から毎年50トン位を輸入しています。ほんのわずかしかないんです。そのほとんどが浄法寺から、7割位でしょうか、浄法寺の漆です。残っている、残っていると良く言われましたけれども、今からは一滴も残らない状況になっていきます。逆に、準備期間があればいいんですが、結局は、準備期間を言っても誰も準備してもらえないので、結局、無理矢理こういう状況になりましたが、これから10年位かけてですね、今の浄法寺の700とか800キロとかの供給を、だいたい2トンから2.5トン位まで増やさなければならぬ計算になります。私としては、国宝・重要文化財が日本産漆になるというのは、当たり前の話だと思います。そういうふうに、下村大臣が知らなかったがために、そういうふうになってしまっただけで、下村大臣が聞いたとたんに、翌日動いたというのは、さすがだなと思いましたが、それだけでは留まるはずはないと思います。今、ちょうど朝日新聞の土曜日の新聞に連載をしていますけれども、私としては漆器を作っている人も50トンの中国産漆を使っていることは許し難い事実だと思います。実際にそういうふうに消費者に対して、そういう事実をちゃんと公開しているかどうか、それは開示していません。日本産漆を使ったのか、中国産漆を使ったのかということは、全く表記されていないことが多いんです。京漆器というものであっても、輪島もそうですが、それは高級なものであればあるほど、当然ながらそれは木が日本産であって、職人が日本人であって、その使ってあ

る材料が漆であったりいろいろなものであったり、日本産であるという大前提に立って、購入されているものだと思います。中身は違います。漆器の世界で、極々一部、まあ何十キロ位だと思いますけれども漆器に使われていると思いますが、それ以外はほとんど中国産漆、それ以外になっています。それは、高級なものを買っている人は、1万いくらか、何万円もするものが結構いっぱいあります。この間、京都の料亭に行ったら、京漆器の組合の人を接待してましたら、何とか日本産漆を使ってくださいという話をして説得しようとしてたんです。そしたら女将さんが出てきて、自分と割と親しい人だったんですが、いきなり出てきて、今の社長の話は、私、毎年毎年、あなた達を支えるために割と高いお椀を買っています。本当にこれが日本産の漆を使っていないのと、その人は攻めてくるんです。その組合の人は使ってません。それは、客観的にみれば女将さんの言葉なんですけど、これは詐欺じゃない、この間の食料品の問題と一緒にじゃない。和牛と思っていたのに、実はオーストラリア産に脂肪を注射しただけのものと一緒にじゃない。私達は何のために大金を出していると思っているんですかという話になっていました。今は、経産省に対して、少なくとも今の漆器の漆の量が、日本産漆を使っているのか中国産を使っているのかを、それを全部表記するように、消費者から見て、日本産漆だったと思っていたのに、この位だったらこの値段は出さない。この値段だったら日本産漆を使っているのだから当たり前でしょうとなっていくようなことをしようとしています。そういう意味で、やはり日本産漆、浄法寺の漆の可能性を考えていった場合に、影響をどの位にするかという問題もあると同時に、どの位、訴えていくかという問題でもあります。少なくとも一般の世の中に対する実態がどうなっているのかということを外に出さないと、この問題は解決されないと思いますが、そういうことをすることによって、やはり、次第にちゃんとしたものと、ちゃんとして営業をしてくれる人も出てくると思います。小西美術工藝社に入ったときに、残念ながら住吉大社が一番の例だったんですが、手抜き工事を結構やっていました。住吉大社で20年に一回しかやらない式年遷宮なのに、まだ、工事が終わってないのに既に工事した部分が剥がれてました。20年間でその状態に放置してきますと、たぶん4、5年位でほとんど裸になってしまうようなことが見えていました。残念ながらそういう工事は入札です。入札を管理する人と設計を管理する人と、合格を出す人がみんな同じ人です。結局、業者として失敗をしてしまえば、その設計管理がうまくいかなかったということで、その人も責任を負うこととなりますので、どうするかというと、逃げます。住吉大社は、小西美術は日光と東京都にありますので、別に大阪にあるわけではないので、結局、住吉大社から当然ながら文句が来ます。どうするかというと、無視。結局、訴えていっても、文化庁もそういう発注していますので、会社に対しては訴えてこない、結局はその工事はそのまま放置されます。新聞に出る小さい業界ですので、割と閉鎖的な所でもありますから、結局はそういうような形でふたをされてしまいます。自分が入ったときに、そういうことをするのは逃げる、次の工事が回ってくる時には、入札だから結局、そういう安い値段を入れてしまえば勝つことができます。そうすれば次の手抜きをすればいいんだという考え方が割と多かったんです。職人はそういう仕事したい人はいないと思います。結局、上の方の方針としてそうになっていました。結局、他の業者は、一番大きい小西美術はそういうことをしてましたので、他の業者も17社が全国にありますけれども、他の16社で、あの中で本当の健全な経営をやっている会社は、ほとんど一つもない。ですから、私はよく言いますが、この業界では、伝統と書いてふりがなは、ぼったくりと書きます。そういうことをやっていて、手抜き工事をすることによって、結局は利益があがると。これは漆塗りですよ、あたかも日本産ですよということは、直接言わなくても、先ほどのお椀を買っている人は、京漆器ですよとって、まさかこれが中国の漆を使っているとは思えないんです普通は。なんですけど、京漆器ですよとって誤解されやすいようなことをやって、削って日本人の首を切って、中国に発注していると。そういうことで、小西美術も同じようなことをやってまして、他の業者を使えばいいでしょうと思われるでしょう。問題なのは17社がみんな悪質企業です。ですから、この悪質にするのか、この悪質にするのか、この悪

質にするのか。それしか方法が無いわけですから。選択肢が無いです。結局そういうところで、信用がおけません。信用が無いですから、今の方針で、文化財はできるだけ狭い、定期でできるだけ終了しない。修理をしても最小限だけの修理をしましょうという、ある意味、うつ病的な悪循環の連発だったと思います。残念ながら、浄法寺の日本産漆というのは、小西美術は380年間で、浄法寺とのつきあいがかなり長いんです。長い歴史の中で、小西美術に負けないだけの悲しい歴史もあったということを知ります。ただ、他の産地も負けてませんので、結局は、この産地にするか、あの産地にするかというような話でした。結局は、なにを申し上げたいかといえば、別にこれで批判だとか言っているつもりはないんです。これは、現状を説明しているだけです。私としては、あれは今までの時代だったと思います。これからの時代というのはせつかく、自民党に、今の政府に、日本産漆に替えてもらいました。今までの閉鎖的な考え方で、どういふふうに生きていけるのかということは、ある意味で賢いというようなやり方は、やめるべき時代になりました。同時に、外に対してアピールすることによって、自分達は健全なやり方でやっている、昔を捨てたような形にして、どんどんどんどん営業していくべきものだと、私は思います。その、浄法寺の可能性ということになりますと、あの可能性は、結局、50トンの中国産漆がこの国の中で使われている以上は、もともとジャパンですので、実際に狙うべき目標はどの位なのかというと50トンです。これは、いうまでもありません。なんで、それで中国に負けなければならないのか、私にはわかりません。中国も発展すればするほど、平均賃金があがってきます。それで、日本としては同じような値段になっていくと同時に、品質はこっちのほうがいいですので、じゃあ、全部中国に替わるような目標を立てていけばどうかと、私は思います。ただ、それには先ほどの話みたいに、いろんな人が、文化財に日本の漆、いろんな日本の伝統に対して、応援したい人がいっぱいいます。私は、小西美術の社長として、それは良くわかりました。小西美術としては、この改革をやり出して、6年間しかやってませんが、2年たったところで、徹底的にいろんなゆがみを直していけば、職人全員を正社員にすることができました。同時に、若い人がほとんど7、8年雇っていなかったんですが、若い人も入ったときの給料からいっさい上がっていかない時代が9年位続いていました。いろんなことを変えることによって、お客さんの信用を取り戻そうということで、全国のお客さんのほうに回りまして、でたらめな工事を全部無償で直しました。職人も大変な時代になりますけれども、正社員にしますので、頑張ってください。それによって明るい未来が、そのうち来るということで、これをやらないと結局、信用がなくなるので、会社がいつ倒産するかは、時間の問題です。ということで、職人に十二分に答えてもらいましたので、やっと28年振りに、きれいな健全な決算になりました。日光東照宮の関係が、私が入ったときにはかなり悪かった。なぜ悪かったかということ、あなた達は答えてないじゃないのということを知りました。その答えてないということは、品質のこともありましたけれども、もう一つあったんですね。若い人を雇っていないんじゃないのということ、結構言われました。要するに、東照宮としては、380年間続いてきました。当然ながら、4百年も5百年も千年も続かなきゃいけない。1万年も続かなきゃいけないところでもあります。そうしますと、今年の工事はどうするかという問題もあります。その次も、その次も、その次も必要になってきます。若い人を育てないと、どうにもならない。今さえよければいいということには、今の世の中には、一般的な考え方もしれませんが、神社としては、許される話ではありません。私が入ったときには、宮司にさんざん言われました。当時は、小西美術工芸社の平均年齢が48.9歳でした。若い人を雇わなければならないということで、結局は、予算が限られてますので、小西美術の職人の中身を全部分析したら、一番上の人たちの1割が、だいたい予算の4割を使っていました。文化財の予算というのは、この10年20年で増えていません。その一番大きいかたまりが小西美術ですので、これ以上にシェアをとることもできません。そうしますと、結局若い人を雇ってくださいということも言われても全部決まっていますので、若い人が入ってこない、入らないということではなくて、入れないという問題

があります。どうしたかといいますと上のほうの職人と何回も何回も会って、話し合っただけで若い人を雇って下さいというのは、上の人たちからも言われてましたが、結局雇えない最大の理由は、上のほうの人たちの右上がりの年功序列的な考え方で、そういう問題がありましたので、簡単に言えば一番上の人たちは、邪魔をしていました。その人たちは、当然、知恵と知識がいっぱいあります。長年、その仕事をやっていますので、当然ながら極めて大事な知識を持っています。ただ、職人の場合は、60代になって、70代になって、そんなにどんどんどんどん良くなっていくかという、その事実はありません。だいたい、50代の後半位からだんだんだんだん力が落ちてきますので、結果としてはいい職人というのは、ベストの職人というのはだいたい50代位の方が一番いいところだと思います。昔からこの制度ですから、あなたは外国人だからそれはわからないかもしれないといわれましたが、調べてみると、大正元年の日本人の平均寿命が40歳、明治元年35歳、要するに年功序列というのは、だいたい、日本企業、海外の企業はみんなそうですが、55、6位がピークを打ってそれから減ってきます。昔であれば、会社が自動的に循環をしていました。今は循環がしづらい世の中になりました。その上のほうの職人とこういう話になってました。若い人を雇わなきゃいけない。予算が限られてます。別に、裏庭には1万円札が実る木を持っているわけではない。問題としてはそういうのはどう解決するのか。3つしか方法はありません。ひとつは、あなたの首を切ること。もうひとつは、あなたは減給に応じてもらうこと。もうひとつは、成仏してもらうこと。こうしたコントロールがききません。それで、切りたいと思えない。そのときに、若い人を入れたいとかそういうことじゃなくて、入れなきゃいけないですから。結局は、一人分はいくらいくらかかりますので、その何人分を用意してもらうのかを皆さんで話し合っただけでいいです。後日、職人の先輩たちから電話がありまして、結果としては、4人分に相当する給料の減給に応じていただきました。あのとき感動しました。1人分になるのかなと、1.5人分だと困りますけど、4人分になったと。一番すごい人は、70%の減給でいいと。すばらしいことをする人もいまして、その人は今でも会社で真剣に仕事をしています。それによって若い人を雇えました。いろんなことをやって、18歳の人たちをどんどん入れて、今、48.9歳の平均年齢が37.9歳まで下がっていています。日本人労働者の平均より低いんです。ですから、若い人が入りたくないこの仕事には興味がない。これも事実ではないんです。ちゃんと求人をしていけば、あとはやるべき人に求人をしていけば、どんどんどんどん人が来ます。今年で75名の会社なんですけど、面接に来た12人、それをとったのは6人、たぶん、1割2割は抜けていくと思うんですけど、だいたいそういう仕組みになっています。毎年毎年、採ることになっています。それによって日光東照宮との関係は、いい仕事を納めます。それで、若い人も雇えます。若い人も育成をします。こういうことをやることによって、どんどんどんどんいい循環になっていて、信用が戻ってきています。そういう意味では、私は、浄法寺の可能性ということで50トンを狙っていくということは当たり前の話だと思っただけで同時に、やはり、若い人を入れる、入れないということじゃなくて、入れなければ原則日本産100%という、今現在の国の方針は、あれは若い人を入れなければ、あの原則は長く続かないと思います。国がせっかくならそういうところで、皆さんを応援しますと、日本産漆をいっぱいつくってください。つくった分だけ全部買います。そういうところで、答えていかないと、小西美術もそうなんですけれども、その気持ちに対して答えていかないと、今度は信用してないうんぬんでなくて、裏切り行為になります。裏切り行為になれば、当然そこで罰がきます。ですから今は、浄法寺の漆の可能性ということで言いますと、ものすごい大きなチャンスが目の前に回ってきています。それに対して答えるか、答えないのかということで、分岐点に来ています。ある意味で、極めて危険な道を歩んでいるところでもあります。そういう意味で、若い人を雇って、若い人を積極的に育てて、漆をいっぱい掻いて、漆を出荷して行って、自分たち業者はそれを全部購入していきまして、全部使います。さらに増やせばさらに買う。今はそういうような好循環の世界に入ってきています。私としては、そういう意味で、この浄法寺というのは、一番昔から大き

な産地として、一番漆を守ってきた産地でもあります。自分たちは漆を使う業者としては、他の産地はいろいろつくってくるでしょう。どんどんどんどん、その競争相手が増えてくると思います。ただ、自分たちとしては、皆さんが日本産漆の生産をやめていった時代で、浄法寺はやめなかった。その義理人情恩返しの世界で、自分たちは一番頑張っていたきたい産地は、浄法寺の産地なんです。部分的には、組合以外の人間を入れない、若い人はなかなか入れない、若い人が来たとしても、組合の外で掻いた漆を売れない。日光に納められないというようなゆがみが、いろいろそういうような話を聞きます。私としては、それは過去の話として、解釈をしたいと思います。これからは、浄法寺に地元、周りの県に対しても同じだと思いますが、高校生を中心に、若い人を漆掻きに来てもらって、同時に小西美術の中でも、浄法寺の漆掻きの研修をしたひとが一人います。その人も組合に入れてもらって、その人も夏の間だけ、漆掻きに来て、その漆を組合の漆として日光に納めてもらいたいと思います。大きな産地を作っていくに当たって、やはりそういったような守りの体制ではなくて、攻めの体制に変えなければならない。その攻めの体制に変えていくためには、前は小西美術は、保存会との関係はあったが、そうではなくて、保存会であっても皆さんが営業してもらって、小売りをしてもらって、この間初めて小西美術は、会社全体で漆掻きの組合の皆さんと懇親会をやりました。研修もさせていただきました。そういうこともこれから頻繁にやっていくものだと思います。最近、下村大臣がいろいろ漆を応援していきましようということになりましたので、NHKも含めて、いろんなマスコミが日本産漆に注目しています。その中で当然ながら、浄法寺が一番注目される場所です。注目されるということはいいことでもあるんですけども、言うまでもなく、注目されることによって、注目されて欲しくないところまで見えてきます。そういうところもクローズアップされます。文化庁も毎日のようにどうなっているんだ、どうなってるんだと、ものすごい厳しい目で見張っています。私たち業者も、昔は信用を失ってしまった悲しい歴史もありますんで、業界全体として、そんなに信用されているわけではないです。ですから、ここで立ち上がって、健全な形でやっていくしかない、私は思います。最後、あと5分しかありませんが、ここで、なぜこういうふうになっているのかを多少、ご説明をしたいと思いますが、そもそも今のところで、急に文化財どうするかという話には、そういう世の中にはなつたかとは思いますが、なぜそうなつたのか、簡単に言うと、それは国が困っているからなんです。今から、だいたい30年位かけて、日本経済はへたすれば半減してきます。経済というものは資本と人と生産性です。資本は日本はこれから投入しても余っている位です。資本をかけてもいろんな経済に対する貢献が無い。あり得ないです。生産性は上げられます。人です。人のところは、日本はどうしてもこれから人が減ってきます。それは何故かと言いますと、戦争が終わった時に、日本人の人口が急激に増えました。その後は、寿命が延びました。それによって73年が実際に日本人の子供のピークなんです。そこへ、急に増えて行って、そこから平均寿命が延びましたので、こういうふうにキープしています。平均寿命が限界きたのはだいたい5年前です。それによって若い人がずっと減っています。220万人位の子供が、今は100万人位を切ろうとしています。そうしますと、先進国で急増するという事は、極めて異例のことなんです。あの時代の特徴なんですけども、言うまでもなく、ローラーコースターみたいなもので、こうやって緩やかに上がっていったものは、緩やかに下がっていきますが、急上昇したものですから、どこかで急降下しないといけないんです。それは、これからの話なんです。先進国のなかで日本は世界第2位です。中国まで入れますと、世界の総額で言いますと、日本は世界第3位です。ほとんどの人は、日本が世界第3位になっていることは技術だ、日本人は良く働くから、手先が器用だからとよく言います。こういうことは先進国になるための当たり前の条件です。先進国、みんな同じことです。一人当たりの生産性をみれば、だいたい一緒なんです。じゃあ何故、日本経済は世界第3位なのかと言えば、それは日本人の人口が1億3千万人だからこそです。ドイツ経済より、日本経済が多くなっていったのは、73年です。子どもの数が一番ピークをうった時と一緒です。どうしても一人当たりの総額が、一人当た

りの生産性が、かける人口当たりでGDPの総額が決まります。どんどんどんどん経済がシュリンクしていきます。シュリンクしていくと年金と医療費は、減るわけではないです。そうすると経済、どうするんだということが最大の問題点になります。ある意味、幸いなことなのですが、日本人一人当たりの生産性というのは、世界24位です。先進国のなかで、下から3番目です。下から3番目ということは、マイナスに聞こえる人がいますが、逆にそれはチャンスでもあります。今までは、総額では日本は勝っている。総額では日本は世界第2位の経済です。自分としては、日本はそこで甘えてしまったと思います。追いつき追い越せということで、ずっとやってきたんですが、総額で追い越したときは、ああこれでいいやということになってしまったと思います。24位ですから、結局は安部総理がおっしゃった600兆円ということは、皆さんで可能か、可能じゃないという人がいます。日本人一人当たりのGDPを、世界20位まで上げるだけで、計算上では600兆円になります。100兆円の違いがあります。100兆円を実現していくためにどうすればいいかといえば、当然国としては一生懸命考えています。そこで一番ポイントとなってくるのは、皆さん頻繁に最近耳にしていると思いますが、観光の話なんです。観光は世界のGDPの中で9%を占めています。日本は2%も無いです。世界としては、外国人の観光客というのは、今年は2千万人になりますが、爆買いに来ている人は、要するに仕入れに来ている人が多いんです。言うのはどうかと思いますが、貧乏な人は、2千万人の中で、1千5百万人位来ています。それは本物の観光客ではありません。ほとんどの場合は炊飯器だとかというものを買いに来ていますので、結局はそういう人たちは、本物の観光客ではありません。数字あわせの部分もあるかと思いますが、ただ、その観光というものは、本当にやろうと思えば、もの凄いパワーも持っています。2%を9%にすることで、どの位のGDPが経済に対する貢献度合いなのかといえば、50兆円なんです。安倍総理がおっしゃっている100兆円の中で、半分がこの観光業からできます。世界のなかで観光客がいっぱい来ている国の外国人観光客の収入の比率でいきますと、実は日本は国としては2千万人になったかもしれないんですが、1億3千万人に対する2千万、タイは2千4百万人の観光客が来てます。フランスは世界ダントツで8千4百万人になっています。ただ、フランスの場合は、6千万人しかいないんです。当然ながら、比率で言えば、あの位の人たちが来てますから、日本よりも全然収入が多いんです。129ヶ国中、日本の観光ランキングは、126です。126位というのは、じゃあ125位はどこなのか、エチオピアです。124位はナイジェリアです。要するに、これ以上下に行けないんです。ということは、無限にアップサイドがあります。伸びしろはいくらでもあります。観光というものは、4条件ということを言われています。歴史文化のある国、気候が多様にある国、それで自然に富んでいる国、食事に富んでる国、食事の種類ですね。ようするに多様性のある国は、観光立国、観光大国になります。実はこの4条件全部揃っている国は、10ヶ国しかないということ言われています。その中で日本ということを考えれば、気候ということでは、北海道もあれば沖縄もあります。ジャパンアルプスもあれば珊瑚礁もあれば、何でも揃っている国です。海岸線としては、世界第6位になっています。植物、動物でいうとガラパゴス島より全然上の、平方キロメートル当たりで見れば、日本というのは植物、動物の多様性を誇っている国でもあります。文化財、伝統芸術、伝統技術、いくらでもあります。食事は和食もありますし、世界の食事も口にすることができます。ですから、考えれば10ヶ国の中で当然のように日本がその中に入っています。10ヶ国の中に入っていけば、どの位の観光客が既に日本に入ってきているはずなのかというと、今の時点で計算すると、全部で5千6百万人なんです。2千万人というようなものではないんです。当然ながら、全国で言いますと、別に文化財があればいいということじゃなくて、文化財もあれば大自然もあれば、それで気候的にはスキーもできるといったような魅力はいくらでもあります。逆に、何も無いと思っけていても、何も無いものをちゃんと整備していけば、ちゃんといろんなことを工夫していけば、いくらでもそういうものは、砂漠でも観光できるものですから。工夫次第で、いくらでもそういう可能性があります。今、そういう意味で文化財というもの



は、より正しく文化財を修理する。そのための日本産漆、そのための浄法寺、なおかつ、文化財はいままでみたいにただ単にそこに建っているだけの形ではなくて、ちゃんと解説をしてもらう、そこで長く滞在してもらう、その意味合いを全部伝えてもらう、中を外からただのぞくだけではなくて、本当に素晴らしいものとして、ちゃんと理解ができるような形に変えなきゃいけないと思います。展示をやれば、博物館と一緒にと思いますが、常設展に行く人はほとんどいません。一回だけですむ。特別展をやる度に人が来ます。その意味で文化財というものは、ただ単にこのお寺が国宝ですと行って、へえっと思って行って通ると、観光立国にはなりません。なぜここに建てたのか、どういう儀式をここでやったのか、この絵があれば、いろんな彩色があったりして、いろんな彫刻があたりすると、この彫刻の意味合いは何なのか、そういうのを全部説明することによって、中に入ることができて、お茶を実際にやってみる、そこに行けば書き物が掛けてあるとか、お能の舞台は、ただ単にお能の舞台であるというだけで、そこに建っているだけで建築のマニアの人以外は、何の良さも感じません。そこでやはり定期的に、年に一回とかそういうものじゃなくて定期的にお能をやってもらおうとか、ちょっとお能の体験でもいいんですが、実際にそこで文化財を楽しむような形に変えないといけない世界に変わりつつあります。それによって日本の歴史、日本の文化、日本の伝統芸能、いろんなものが海外の人たちのみならず、国内の若い人でも体験してもらう。はっきり言って、今の文化財はつまらないと思います。200円の拝観料であったり、拝観料は200位しか価値がないなというも思います。そうではなくて、文化財に行く、そこでいろんなものを説明してもらって、いろんなことを勉強することができる、いろんなことを体験することができる、そこで食事もできれば、一杯飲むことも許されるようになるとか、こういうことやることによって、そこに日本の観光大国、観光立国の話が実現できるんじゃないかなと思います。今までは、あまりに工業化、産業ばかりに力を入れてきた国ですから、これからはやはりもっと豊かな形で、いろんなことを変えなきゃいけない時代にもなってきています。経済合理性うんぬんではないです。皆さんの年金医療負担を出していくためには、経済が元気になってもらわないと困ります。極論なんですけど、浄法寺で50トンに向けて、それでどんどんどんどん体制を変えて行って、若い人も、外の人もどんどんどんどん入れて、50トンに向けてその体制をつくれるかどうか、それができなければ、皆さんの年金と医療のカットがいつなってくるのかはわかりません。極論すれば、そういう時代に入りつつあると思います。私としては、今まではどうだったかというのは、それは忘れまじょうと、これから浄法寺で、50トンの日本産漆を毎年毎年造れるような、体制にさせていただきたいと思いますので、そういうことで、こちらからお願いして頭下げて、よろしくお願ひしますということを使うしかないというふうに思います。明るい未来に向かって、この体制をぜひとも1日でも早く実現していきたいと思います。この辺で失礼をしたいと思いますので、ご静聴ありがとうございました。